

## 紹介

### ●室町時代の研究

史學地理學同友會編輯

本書は彙に同會が「室町時代の文化」を題して夏期講習會を開いた時の講演を主とし四五の新しい論著を加へて出版されたものであつて、編者が近世日本社會の母胎であり、現代文化の醇素である所の室町時代を充分に闡明し精確に熟知する事の必要を高唱して居る事によりて、本書の意義を知る事が出来る。「應仁の亂に就て」内藤虎次郎、「文藝奇蹟譚の成立」阪倉篤太郎、「室町時代の教界と蓮如及び眞盛」牧野信之助、「五山文歩論」那波利貞「鹿苑寺金閣の建築」武田五一、「室町時代の美術工藝」佐々木恒清、「壬生狂言源流考」吉澤義則、「室町時代の能樂」岩橋小彌太、「室町時代の京都の史蹟」小酒井儀三、「室町時代の皇室御領」中村直勝、「應仁前後の京都」魚澄惣五郎、「室町時代の文化的概観」黒坂勝美、「鎌倉より室町へ」三浦周行の十三篇より成るが、就中、内藤博士

が應仁亂のために足輕が認められた事はまた一面から見て天才のない時代であつたこと、此時代に日本道德の經典とも言ふべきものが組織され初め政治上下何等統一なき時代に文化的に世の中を統一するものが出来た事を指摘された點、吉澤博士が壬生寺の猿の狂言と謠曲熊坂の中に見える壬生の小猿を結び附け、熊坂の謠曲が出事た時代には既に出来て居つたもので、それは應永頃か遅くも明應頃まで、あらうとされた假定説、黒坂博士が此時所を以て公武共に墮落した時代であること、其の猶つた代から新しい社會を走り出さうとする努力がほの見えるとされた事、三浦博士が鎌倉幕府と室町幕府とをあらゆる方面から比較し、特に前者が御家人の所領保護干渉に全力を盡したに對して、後者が所領に對して放任解放になつた事を認め且つ鎌倉時代と室町時代との差を外國文明の影響によりて説明された點等は何れも傾聴すべき言である。本文の外に十六葉の口繪圖版五葉の挿入圖版を加へて居る。その中でも壬生狂言圖の木版を一葉入れた事は目先が變つて面白い企であらう。菊版三七四頁、定

價三八〇。星野書店發行〔中村〕

●重校海東金石苑、補遺、附錄

劉喜海輯錄  
劉承幹重校

海東金石苑は諸人熟知の通り劉燕庭の編著に係る朝鮮

金石の大觀なるも、其の稿本は咸豐十年の亂に遭ひて燒

失散亂せしかば、同治年間に鮑子年が其の跋尾を刊行し

光緒七年に張松坪が前四卷を刊行せし雖も、全部八卷

の後四卷は容易に其の副本すら獲られざりければ、從來

の本書は實に闕卷の儘なりき。然るに數年前吳興の劉承

幹君偶々書店に於て劉氏の初稿本を獲たり、卷二より卷

八に至り、首卷を闕きしも其の喜や譽ふべからず、據つて

以て後四卷を補刻し以て張本の闕を補はむと欲せし折柄

又、北京にて其の首卷の離在せるを知り、之をも獲たり

上虞の羅振玉君の注意に基き原碑の文を以て張本の譌舛

を正さむとせし、主として葉氏平安館寫本並に入手し得た

る原碑拓本を以て校寫に努め校訂するもの六十三碑、附

録に入るもの七碑、葉氏寫本より得たるもの八碑を執り

劉氏の完本に過ぐる善本を刊行するを得たり、茲に至つ

て本書の内容實に一層の値を發す、中華民國十一年の劉

氏嘉業堂の刊行に係るも其の我が邦に舶載せらるゝもの  
尙ほ甚だ稀なり、敢て茲に紹介して世の朝鮮史家金石文  
家の利用を待つ。

●國學叢刊 第一卷第一期

北京の國立北京大學の機關雜誌、國學季刊に對して南

京東南大學、南京高等師範學校の支那學研究會員の機關

雜誌として表記の如き學術雜誌、昨年三月を以て創刊せ

らる。支那學を整理して文化を増進するを宗旨とし、挿

圖、通論、專著、詩文、雜俎の諸欄あり、毎年三、六、

九、十二月に刊行す、本號收むる所は挿圖に周散氏盤原器

拓本、周王陵車辨拓本、通論に論讀古書之怡趣（陳鐘凡

君）、秦漢經師之方士化（陳鐘凡君）、周季文史之分途及

文學之派別（顧實君）秦漢燒書校書兩大案平議（顧實君）、

專著に西漢周官師說故（劉師培君遺著）、詩經毛傳改字釋

例（陳鐘凡君）、禮經釋服（陳延傑君）、老子道德經解詁（顧

實君）、楚辭校補（易培基君）、明儒（陳鐘凡君）、中國修辭

學史略（胡光煒君）、屈子生卒年月及流放地攷（范希曾君）

論楚人之文學（王會稼君）、古重文攷（劉師培君遺著）等あ